

令和7年度学校評価表

品川区立源氏前小学校

校長 坂詰 晃

源氏前小学校校区教育協働委員会

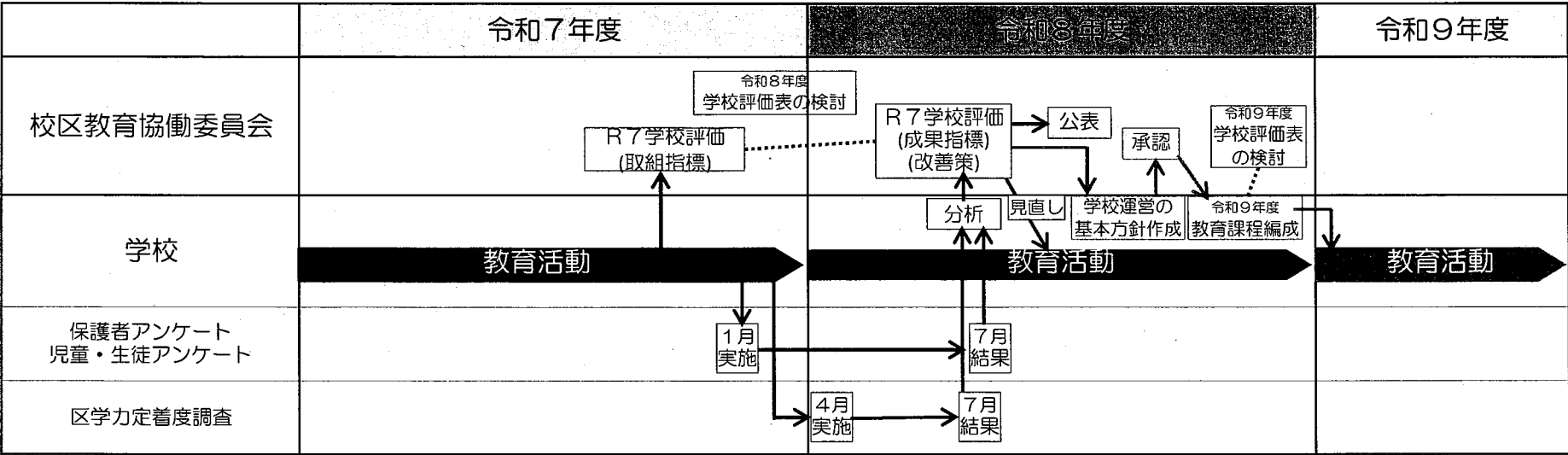
委員長 三保 和彦

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		○各学力調査の結果を分析して、児童の学習定着度の状況を把握し、授業改善策を講じて成果につなげる。 ○「源氏前ハンドブック」をもとに、学習規律の定着を図る。 ○ウェルビーイングの視点から、楽しい学び・わかりやすい授業・確かな学力の定着を図る。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	各学力定着度調査において、区平均の到達指数を上回る。	全国・品川区の学力定着度調査では、学年によって差があるものの、区平均を上回った教科・領域は半分を下回った。全国平均については全体90%で上回り、昨年度の結果を上回って	B	学力向上委員会を主体として結果分析した各教科の成果・課題についてプレゼンを作成し、校区教育協働員会で報告・熟議し、授業改善プランとして区に提出・保護者会で伝達した。課題全体に共通する、題意の正しい読取りや考えのアウトプットについて、国語科だけでなく教科横断的な取組を検討・実践していく。また個別最適な学びや探究学習の推進、体験活動・楽しく学べる仕掛けの工夫など、実態に応じたアプローチを組織的に展開
	品川区学力定着度調査において、全学年で、区平均の到達度指数を上回り、成果と課題を分析し、授業改善策につなげる。	各教科において区平均を上回ったのは、いくつかの学年に留まった。全国平均はほとんどの学年・教科で上回った。特に国語は数値の向上度が一番高く、校内研究の成果の表出と見られ	B	
	全国学力定着度調査において、区平均の到達度指数を上回り、成果と課題を分析し、授業改善策につなげる。	算数・国語いずれにおいても全国・東京都の平均を大きく上回った。(全国平均値との差は、算数+20pt、国語+10pt)これまでの学びが定着していると捉えられる。	A	
②	「源氏前ハンドブック」の共通理解・共通実践を通して、全学年児童が学習規律を定着する。	児童83%、保護者85%が肯定的な回答をしている。教職員も100%が共通理解・共通実践を意識して展開している。同じ割合を実感できる態度の定着につなげていくことが課題である。	B	ハンドブックについて、周知や徹底が浸透している。姿勢タイムを頑張っている児童も多い。学習規律の定着には、メタ認知ができていない部分もあり、粘り強い指導が必要である。低学年からの意識付けとともに、教師が確実に実行し、褒めて認める指導を実践していく。
	毎日の「姿勢タイム」等の取組を生かし、学習の準備・挨拶・返事・聞き方と話し方について、全学年の児童に、自主的な態度を身に付けさせる。	学習規律を守り、自主的に学ぶ態度を身に付ける意識として、児童83%が肯定的な回答をしている。意識の高さを生かし、常に授業態度に表れるよう指導・支援していく必要がある。	B	
③	ウェルビーイングの視点から、「楽しい学び」「わかりやすい授業」「確かな学力の定着」について、70%の児童にそう思うと実感さ	児童は、「楽しい学びがある:91%」「授業がわかりやすい:87%」「授業内容がわかっている・できている:87%」と肯定的に回答している。	B	児童が授業を楽しく、前向きに捉えているのは成果である。学力の定着において、点数や結果で決めるだけではなく、思考・判断・表現などは授業で考える過程や話し合い、考えや意見の記載などにも表出される。教師はそれを見取り、児童や保護者に伝えていく必要がある。インクルーシブの視点も大切に
	授業の工夫、体験的な学習、CSを生かした出前授業、授業力向上研修、個別指導充実、家庭学習定着を軸に、楽しさと学力定着の両方を実現する。	上記の質問において、保護者からも90%を超える肯定的な回答を得られた。「確かな学力の定着」での教員による肯定的な回答は76%とやや低かった。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○教育目標「心豊かな人」を重点目標にし、愛情をもって児童に接し、相手の立場や気持ちを考えられる児童を育む。 ○規範意識を向上させ、生活規律の定着を図る。 ○交流体験活動を行い、豊かな人間性の育成を図る。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	教育目標「心豊かな人」を重点目標にし、愛情をもって児童に接し、相手の立場や気持ちを考えられる児童を育む。	「自分を大切にしながら友達も大切にしている」に肯定的な回答をした児童・保護者は、それぞれ90%を超えたが、教職員は62%と低かった。	B	児童は、大切にしている友達の対象が仲のよい友達に限られていたり、やる気や知識があっても実際の行動と乖離していたりする可能性がある。場面に合わせた指導や、幅の広い人間関係の関わり合いの機会(グループや当番等)を展開していく。
	いいことみつけ活動やよいどんカードの活用全校体制や日常的に人権に配慮した言動を意識させ、感じる心を育むことができる。	「いいことみつけ活動」や「位置について・よいどん!カード」の活用において、児童・保護者・教員全て80%以上が肯定的な回答をしている。	B	
②	規範意識を向上させ、生活規律の定着を図る。	「きまりを大切に迷いを掛けずに気持ちよく生活している」に肯定的な回答をした児童・保護者は80%を超えたが、教職員は52%に留まった。	B	定着度に目を向けると、教職員からは厳しい評価となった。また80%の児童ができていても、できていない児童や場面に目が向けられ、全体が整っていないといけないという傾向にあるかもしれない。挨拶については、児童や保護者もやや低い結果であった。家庭にも引き続き協力を依頼したり、市民科で挨拶の意味を考える授業を行ったり、挨拶の取組・啓発を教職員が姿勢で示していったりしながら、成果を上げていく。
	毎日の学校生活を通して、きまりやルール、マナーを守る気持ちよさと態度を身に付けさせ、挨拶や言葉遣い、全体で集まった時の態度、安全意識の向上などを定着させる。	挨拶や言葉遣い、全体で集まった時の態度、安全意識における肯定的な回答は、児童・保護者共に平均80%であった。挨拶について、教職員の肯定的な回答は41%と低迷し、平均も50%であった。	C	
	「源氏前ハンドブック」をもとに、教員と家庭が連携しながら、挨拶や早寝早起き朝ごはんなどの生活規律を身に付けさせる。	挨拶における肯定的な回答は、児童86%、保護者73%であり、早寝早起き朝ごはんの習慣は、児童が71%、保護者が90%が肯定的な回答となった。	B	
③	交流体験活動を行い、人間性の育成を図る。	CSを主体とし様々な交流体験活動を取り入れている。交流活動や地域の方々との学びや体験学習について、児童からは、85%の肯定的な回答を得られた。	A	それぞれの交流活動では、年下の子たちの面倒を見たり、準備や活動を工夫したりして、生き生きとした表情での活動場面が目立った。また礼節を大切に真摯に聞く・学ぶ姿勢も育まれていた。教科横断的な活動の機会とも連動させる等、更なる工夫を重ね、充実につなげていく。
	縦割り班活動、金管バンド活動、保幼小連携、鑑賞教室や出前授業を積極的に取り入れ、人との交流の機会を生かし、様々な立場や考え方に気付かせ、教育成果を高める。	保護者は96%が、教職員は100%が、肯定的な回答をしている。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○体力テストの結果において、各学年で区の平均を上回ることができる。 ○体育の授業の充実とともに、体を動かすために工夫した活動を多く取り入れる。 ○健康に関する意識の向上を図る。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	体力テストの結果において、各学年で区の平均を上回ることができる。	全国平均値との比較において、2年男子・5年男女が上回っており、2年男子・3年男女・6年男子がほぼ同じであった。下記のように、伸びた種目と伸びにくい種目とがはっきりしているのが特徴であった。	B	体育科における授業展開・指導方法工夫や、行間活動・運動会練習等を通して、通年で体力向上を目指してきた。全国平均と遜えない結果や数値の維持が継続できており、校庭がないハンディを少しでも克服したいという努力は、成果をあげている。取組の充実に向けた検討を重ねながら、継続していく。
	昨年度の実態から、課題の領域で工夫した活動を設定し、記録向上につなげる。	経年比較では、大きな変化は見られなかったが、極端なマイナス数値の種目はなくなった。数値の高い種目は長座体前屈・立ち幅跳び、低い種目は握力・ソフトボール投げ・50m走であった。	C	
②	体育の授業の充実とともに、体を動かすために工夫した活動を多く取り入れる。	「運動機会の工夫創出」について、児童は88%、教員は90%の肯定的な回答を得た。	B	体育館・屋上に全員で移動し、よく遊ぶ姿が見られている。クラスレクなどと連動させ、体力向上につなげることができている。今後は、屋上体育の実施増加も検討する。また体育委員会が主となり、ロイロノートで運動の見本動画を配信する等の取組を増やし、自治的・日常的な活動へと進展させていく。
	校庭使用不可をカバーすべく、テクニカルアドバイザーの活用の充実とともに、体育館や屋上の利活用、短縄や運動習慣の設定など、工夫して運動機会を創出する。	屋上・体育館遊びの配当時間は、全員で出かけて教員も一緒に遊ぶなど、よく体を動かしている。短縄・長縄・スポトラなど強化週間を作って全校体制で取り組むことができた。	B	
③	○健康に関する意識の向上を図るため、工夫した教育活動を展開させる。	食育充実や学校保健委員会の全校実施に対して、児童は81%、保護者91%、教職員96%の肯定的な回答が得られた。	A	学校保健委員会は、全校体制で健康を考える機会の創出につながった。食育については、普段の給食にも目を向けさせたい。「いただきます」の意味を知り、残菜の多さにも気付かせ、無理して食べさせるのではなく、少しでも減らせるような意識向上につながる授業を取り入れていく。
	食材に触れる活動を取り入れた食育を実施するとともに、学校保健委員会の開催方法を工夫する。	食材に触れる授業は、児童の反応がよく成果を得ている。学校保健委員会では、保健給食委員会が中心となって、児童主体で健康について考えたのは価値の高い実践であった。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○「いじめは絶対にゆるされない」ことを、児童・教職員・保護者・地域が認識し、学校生活の根幹に位置付ける。 ○外部機関との連携を密に行い、いじめの未然防止、迅速な組織的対応、早期解決につなげる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	○「いじめは絶対にゆるされない」ことを、児童・教職員・保護者・地域が認識し、学校生活の根幹に位置付ける。	「いじめは絶対にゆるされない」という約束を守っているという質問において、肯定的な意見は、児童が79%、保護者が82%、教職員が83%であった。	B	「いじめは絶対にゆるされない」という約束の遵守は、児童においては最低でも90%は超えたい。いじりなど表立っていじめと認識しづらい事案や嫌な思いをしたことが、解消につながっていない部分もあるのかもしれない。いじめトリプルチェンジ授業で、ゆるされない理由をきちんと考える機会を創出している。児童には自分ごととして捉えさせ、いじめのメカニズムや事例、対処法の理解と定着につなげていく。保護者との連携強化も図っていく。
	「学校いじめ防止対策基本方針」について、4月に改訂し、教職員で確認するとともに、HPにアップする。4月の全体保護者会で校長から保護者に講話を入れる。全校朝会で、校長からいじめに関する講話を行い、全校で「いじめ根絶」を徹底する。	4月に改訂しHPにアップした「学校いじめ防止対策基本方針」には、これまでなかったいじめ事案に対する対応フローチャートを掲載するとともに、全体保護者会でも話題にして周知させた。5月の全校朝会では、いじめに関する講話をし、「源氏前いじめ根絶宣言」について全体で確認することができた。	B	
②	外部機関との連携を密に行い、いじめの未然防止、迅速な組織的対応、早期解決につなげる。	事案発生時には、即日学校いじめ対策委員会を開催、対応を協議し迅速な動きを徹底してきた。HEARTS、教育委員会には随時連絡を入れ、報告・対応への相談を行っている。	B	学校は法を順守し、組織的な対応・対策に努めており、それを徹底・継続していく。いじめを見付けたら大人に知らせる児童が72%ということは、10人に3人はスルーしてしまう、ということになる。前出での「自分も大切・友達も大切」は93%という数値と同じ水準を目標とする。「学校だけでなく、これから社会に生きていくときにも、いじめは絶対に許されはしない」という広い視点や考え方で指導する。トリプル解消の手段として、無視や仲間外れといったいじめとなる手段を選択しない・させないことを当たり前にできる指導が重要である。「状況によっては、いじめられても仕方ない」という考え方はよくないことを理解・実践できるように、繰り返し指導していく。
	HEARTS、教育委員会と情報を共有し合い、デイケンやいじめDアンケート、目安箱なども活用しながら、迅速かつ組織的な対応を図っていく。	早期発見・迅速対応について、教職員は96%、保護者は82%が肯定的な回答をしている。「いじめの場面があったら、大人に知らせる」について児童の肯定的な回答は、72%にとどまった。	B	
	弁護士による「いじめ予防出張授業」や市民科授業地区公開講座での講演などを実施し、法的なアプローチからいじめの未然防止につなげていく。	「いじめを防ぐための授業を行っている」という質問には、児童89%、保護者82%が肯定的な回答であった。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 特色ある教育活動に関すること他

重点目標		○地域を生かした教育活動を展開し、コミュニティ・スクールを充実させ、教育成果を高める。 ○源氏前小学校の活動を地域で披露し、交流を深め、地域の活性化につなげることができる。 ○ウェルビーイングの視点から、校内環境を常にきれいにし、教職員が働きやすい環境を整える。〈NEW〉		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	地域を生かした教育活動を展開し、コミュニティ・スクールを充実させ、教育成果を高める。	児童94%、保護者96%、教職員93%が、地域を生かした活動の充実について、肯定的に回答している。	A	学校地域コーディネーターの人脈や働きかけも成果を相乗的に向上させている。校区教育協働委員の方々も、各活動に参加くださり、評価と助言をいただくことができた。今後も、計画的・継続的な活動を実施し、成果と課題を確認しながらブラッシュアップを目指していく。
	お茶の淹れ方教室、茶道教室、華道教室、お琴教室、地域未来塾など、地域の方々に講師にお招きした活動を展開する。	コミュニティ・スクールの特色を生かし、様々な交流・体験活動を、計画的・継続的に展開できた。教科横断的な活動も工夫することができた。	A	
②	源氏前小学校の活動を地域で披露し、交流を深め、地域の活性化につなげることができる。	児童85%、保護者96%、教職員96%が、地域活動での発表や活躍について、肯定的に回答している。	A	児童には自尊感情・愛校心・地域愛が育まれ、保護者やPTA、地域の方々の協力や支援とともに、感謝の言葉をいただいている。特に金管バンドでは、指導者・支援者に地域の方を参入させ、教員が代わっても持続可能な指導・活躍が可能になるような工夫を展開していく。
	地域祭りで演舞を披露したり、金管バンド演奏会を開催したりして、地域の方々との交流機会の充実を図る。	地域のイベントで、金管バンドは2回演奏し好評を得た。地域祭りには、5,6年生有志が御神楽舞を披露した。伴奏となる和太鼓を児童が演奏するなど工夫して盛り上げた。	A	
③	ウェルビーイングの視点から、校内環境を常にきれいにし、教職員が働きやすい環境を整える。	「安心できる授業・一人一人に寄り添う対応」について、児童86%、保護者80%が肯定的な回答をしている。教職員も97%が意識して実践につなげている。	B	児童の活躍や工夫が校内掲示に反映され、CSボランティアの方々が作成してくださった掲示物も各月で張り替えられる等、明るく穏やかな校内環境が整ってきた。授業の土台として、「誰一人取り残さない」「一人一人に寄り添う」という意識が教職員に強く認識され、児童・保護者にも伝わっている。余白・ゆとりを確保し、児童に向き合う時間を保証していく。ウェルビーイング意識・実践を日常の学校生活・教育活動に浸透させていく。
	校内環境を整え、(人権配慮・清潔感・温かみのある掲示物)安心感や過ごしやすさを実感できるようにする。	CSボランティアの協力を得て校内掲示を充実させたり、教員で校内整備を計画的に実施したり、教室環境の保持を相互確認し合ったり、実践を工夫しながら行うことができた。	B	
	働き方改革を推進し(会議減少、余白とゆとりの確保、風通しのよい組織編成)、ストレスを減らし、健康とやる気のあふれる職場環境を保持・向上させる。	余白やゆとり、児童に向き合う時間の創出や風通しのよい組織編成について、教職員86%が肯定的な回答をしている。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成